

関西
ステンレス

輸出動向とニッケルを注視、様子見

(大阪) 関西地区のステンレススクラップ相場は横ばい。前半に5円切り上がった市況は、模様眺めのまま月末に差し掛かった。指標ニッケルが足元1万8千ドル台で2年ぶりの安値にあることは懸念材料だが、現物タイト感を背景に値下げ機運が高まる気配はない。一方で、直近の市況をけん引する輸出筋に上値の更新も見られないため、次の手掛かりを模索する商状だ。

ニッケル価格の下落を映し、中国現地のSUS304スクラップ相場は円換算で足元195円前後(10月第4週時点)に軟化している様子。日本国内の中国向け輸出筋の実勢高値は190~195円見当のままだが、複数の商社筋は「下値寄りの傾向にある」と指摘する。

一方、韓国向け輸出大手のSUS304新切れの仕切り値も実勢中心値が190~195円見当で横ばい。販路の拡大と絶対数量の不足懸念で集荷意欲は底堅さが見られるが、ある納入筋は「これだけ流通玉が少ないと、買値に多少色を付けても入荷量に大きな変化はない。極端な高値は一部の相対取引に限られるはずだ」と話す。

発表を間近に控える韓国ポスコの11月購入価格はニッケル安で引き下げ観測が優勢となっているが、あ

る間屋筋は「ポスコの買値は国内ミルより高水準にある。下げ幅にもよるが、すぐさま弱気材料とはなり得ないはずだ」と語る。

国内ミルの買値は190~195円見当で推移。生産に改善の兆しは見られないままだが、スクラップの絶対数量の不足懸念は付きまとう状況。ある直納筋は「上値の重い半面、下げも考え難い。月内は横ばいで終えそうだ」と漏らす。

LMEニッケル・ステンレススクラップ相場推移

	LMEニッケル相場 (月平均) \$/MT	LME Ni在庫 (期末/t)	ASIA-SABOT \$/MT	フェコロム相場 高炭素品・\$/LB	為替相場 (TTS)
2020年平均・合計	13,773	246,708	1,198	118.75	107.82
2021年平均・合計	18,478	101,886	1,659	160.38	110.80
2022年平均・合計	25,638	55,476	1,929	189.25	132.43
2023年1月	28,240	49,374	1,730	157.00	131.35
2月	26,890	44,148	1,660	157.00	133.75
3月	23,307	44,364	1,490	157.00	134.92
4月	23,757	39,918	1,470	180.00	134.40
5月	22,230	37,782	1,460	180.00	138.43
6月	21,193	38,850	1,440	180.00	142.27
7月	20,898	37,536	1,410	159.00	142.30
8月	20,498	37,194	1,430	159.00	145.84
9月	19,629	42,228	1,430	159.00	148.73
10月	18,360	44,862	1,340	161.00	150.46

※10月は23日までの平均値

23年1~6月の世界ステン鋼生産2844万ト 前年同期比1.7%減

世界ステンレス協会がこのほど発表した23年上期(1~6月)の世界ステンレス粗鋼生産量は前年同期比1.7%減の2844万4000トだった。高水準の生産体制を維持した中国のみ前年実績を上回ったものの、他の地域は世界的な景気の停滞でステンレス鋼の需要が伸び悩み、軒並み前年実績を大きく下回った。全体量は2年連続の前年割れとなった。

地域別では中国が最多で、同8.2%増の1758万7000トと唯一前年実績を上回り、世界全体の6割超を占めた。ゼロコロナ政策の解除で、需要増に期待した現地中小ミルが生産を増やし、高水準を維持した。

一方、欧州が同13.4%減の313万6000ト、米国が同

13.5%減の94万2000ト、アジア(中国と韓国除く)が同14.6%減の331万8000ト、その他地域(ブラジル、ロシア、南アフリカ、韓国、インドネシア)も同15.2%減の346万2000トでそれぞれ2桁減となった。

2023年上期(1-6月)世界のステンレス粗鋼生産

世界ステンレス協会資料(単位:1000ト)

国・地域	2023年	2022年	2023年	前年同期比
	4-6月期(2Q)	1-6月期	1-6月期	
欧州	1,495	3,621	3,136	-13.4%
米国	465	1,089	942	-13.5%
中国	9,314	16,251	17,587	8.2%
アジア(中国・韓国除く)	1,687	3,887	3,318	-14.6%
その他	1,799	4,083	3,462	-15.2%
世界合計	14,759	28,931	28,444	-1.7%

※その他はブラジル、ロシア、南アフリカ、韓国、インドネシア

富士興産、原料の品質管理や安全確保に注力

(大阪) レアメタルやレアアースのリサイクルを手掛ける富士興産(本社=大阪市浪速区、赤嶺和俊社長)はこのほど、原料の品質管理を強化するため、本社分析室の卓上型の蛍光X線分析装置を更新し、日立ハイテクサイエンス製「EA1400」を導入した。



蛍光X線分析装置

同機は新型のシリコンドリフト検出器を搭載し、高感度で分析精度の高い測定を実現。微量元素の検出性能に優れており、金属種の品質管理などで高い効果を発揮する。

また同社は6日にThermo Scientific社製の携帯型放射線測定機「サーベイメータRadEyeB20-ER」を導入しており、大正工場・倉庫(大阪市大正区)の設置型放射線測定機と併用し、原料の安全確保にも努めている。



携帯型放射線測定器

赤嶺社長は「近年、各メーカーの検収は厳しさを増しており、微量の不純物の混入にも細心の注意を払う必要が出てきている。これからもメーカーとの信頼関係を深めるため、安全で安心できる原料の仕入れと供給に注力していきたい」と方針を語る。